

昔むかし。

年寄りには、百歳になるとおぼれ死にさせられるという時代がありました。

この時代に、キンディキスという年寄りがいました。キンディキスは、もう百歳になつていました。息子は、父親思いだったので、キンディキスをおぼれ死にさせたりしないで、こっそり小さな部屋にかくまっていました。

あるとき、ひどい日照りが続き、国じゅうの畑がかわれてしまいました。食べるものがなくなり、人びとは、種もみまで食べてしまいました。

ある日、王さまは、村むらを見回っていました。どこの畑も、はだかだというのに、キンディキスの息子の畑だけは、ライ麦が青あおとしげっていました。王さまは、ふしぎに思つて、キンディキスの息子に、

「どこから、ライ麦の種を手に入れたのか」とたずねました。息子は、

「屋根の麦わらを下ろして、うちくだいて、まきました。麦わらの中に残っていたもみが、芽を出したのでございます」と答えました。王さまは、そのやりかたをだれに教わつたのかとたずねました。息子は答えませんでした。けれども、王さまがどうしても答えるようにせまつたので、息子は泣きながらいいました。

「百歳になる父親が教えてくれました」

王さまは、

「泣くんじやない。そんなに知恵のある父親なら、おぼれ死にさせてはいけない」といいました。息子は大喜びしました。それから、キンディキスも、逃げかくれしないであちこち歩きまわりました。

つぎの年、キンディキスは畑にライ麦をまきました。一分まいては立ち止まり、また一分まいては立ち止まりしていました。そのとき、王さまが通りかかつて、

「どうしておまえは一分まいては立ち止まっているのか」

「はい。よい一分ならまきますが、悪い一分ならまきません。立ち止まってよい一分を待っているのです。もし芽が出なかつたら、むだになってしまうからです」

「それがはっきりわかるのか」

「はい、わかります」

「では、ひよつとして、自分がいつ死ぬかもわかるのかな」と、王さまはたずねました。「はい、わかります。わたしは、クリスマス・イヴに死ぬでしょう」と、キンディキスは答えました。

「すると、わしが死ぬのはいつかな」

「王さまは、復活祭の晩にお亡くなりになるでしょう」

「おまえ、死なないですむ方法はないかな」と、王さまがたずねると、キンディキスはいいました。

「わたしはだめですが、王さまは大丈夫でございます。もし王さまが、もっと長く生きていたいとお思いでしたら、復活祭の前の日に、何かを盗みにいらっしやることです」王さまは、お札をいって帰りました。

クリスマス・イヴになると、王さまは、使者をつかわして、だれかなくなった者はいないか調べさせました。使者たちはもどってくると、キンディキスという年寄りがなくなったと報告しました。王さまは、これを聞くと、キンディキスが真実を語ったのだと分かりました。そして、いらいらしながら復活祭を待ちました。

復活祭はまもなくやって来ました。その前の晩、王さまは、ぼろぼろの物乞いの服をまとって、盗みに出かけました。

お城を出てしばらく行くと、本物のどろぼうに出会いました。そこで、いっしょに盗みしようということになりました。王さまが、

「おい、王さまのところに盗みに入ろうじゃないか。あそこなら、たんまりある」というと、どろぼうは、

「王さまは、とてもよいかただ。あそこには行かない」といいました。そして、総督の屋敷に盗みに入りました。

総督の屋敷に着くと、どろぼうが王さまに、三階までよじ登るようにいいました。

「あんな高い所まで、どうやってよじ登るのだ」と、王さまがいうと、どろぼうは、鉄の手袋で王さまの頭をガン！とたたいていいました。

「なんてどろぼうだ。手袋も持っていないなんて」

そこで、王さまは下に残り、どろぼうがよじ登っていきました。じきに、どろぼうがお金の入った小袋をひとつ持って降りてきて、うれしそうにいました。

「なあ、いいことを聞いてきたぞ。明日、ここでお祝いの宴会が開かれる。王さまも招

かれるんだ。みんなは銀のさかずきでワインを飲むんだが、王さまのは金のさかずきで、ワインに毒が入っているんだ。王さまが飲みほすと毒殺されるって寸法だ。おれは、明日の朝、お城に走って行って王さまにお知らせするつもりだ」

王さまはうれしくなったので、どろぼうに、

「なるほど。ところで、おれの分け前はいいよ」といいました。すると、どろぼうは、また鉄の手袋で王さまの頭をガン！とたたいて、

「おれを密告するつもりだな。だから分け前はいいというんだろう」といいました。

王さまが、

「そんなことはしない」というと、どろぼうは、

「じゃあ、どこで金を分けよう。あんたの所へ行くとするか」といいました。王さまは、あわてて、

「いや、あんたの所へ行こう」といいました。

ふたりは、どろぼうの家に行つて、お金を分けました。王さまは、分け前のお金を取つて、帰っていきました。帰る道みち、王さまは、どろぼうの家からお城までのすべての家の戸に、小さい十字のしるしをつけました。お城に帰り着くと、王さまは、お金をベッドの下に放りこんで、安心して眠りました。

朝になると、王さまは、家来に命じて、十字のしるしのついた家をたどらせて、最後の家にいる男を連れてこさせました。王さまは、たずねました。

「ゆうべはどこにいたのだ」

「どこへも参りませんでした、王さま」

王さまは、ベッドの下からお金を引き出して、

「わたしは、おまえと盗みを働いたぞ。それだけではない、おまえに手袋でたたかれもしたぞ」といいました。どろぼうは、王さまの足もとにひれふしました。

「お許しください。王さま！」

王さまは、どろぼうを床から立たせていいました。

「おまえは、わたしの命を救ってくれた。今のところは、家で待っているがよい」

王さまは、総督のお祝いのお宴会に出かけて行きました。そして、屋敷の周りにこっそり自分の軍隊をひかえさせました。

テーブルには、ごちそうが並び、みんなには銀のさかずきが用意され、王さまには金

のさかずきが渡わたされました。総督はいいました。

「では、王さまの健康を祝しゅくして、乾杯かんぱいをしようではありませんか」

王さまは、

「けっこう。だが、乾杯の前に、総督にひとつ頼たのみがある」といいました。

「なんなりと、おっしゃる通りにいたしましたしょう」

王さまはいいました。

「さかずきを取りかえよう」

総督は、さかずきを取りかえました。そして、みんなで、さかずきを飲みほしました。

総督は、自分で毒を飲んで死んでしまいました。王さまは、軍隊に合図あいずをしました。すぐに兵隊たちが総督の仲間をつかまえてしまいました。

そののち、王さまは、あのどろぼうを新しい総督にして、ずっと幸せに暮らしました。それから、もう年寄りをおぼれ死にさせよとはいわなくなりましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話33 リトアニア』鬼頭恵美子訳／ぎょうせい